へ13
3836
14

万亭應賀作
作題人名同者
上

明へ13
號3836
巻14

塵の塵

有無古今編上の巻

嘉永八年

乙卯春

萬亭作

一寿齋画

浅草人形町通
上総屋市兵衛板

釋迦八相倭文庫三拾三編

夫女の三十三歳ハ三三とゝ語因とゝして大厄年と俗ゝ稱べ外ゝ據と曾不知とゝの三拾三編ハ鬼子母の大厄秘清めて孩子と護る發と鬼子母の説ハ顕正論又鬼子母經及び寄帰傳並に集等皆異説あるゞ故其撮要を再戯して吉祥果と九色の鹿を青月鸛とゝ贅説過る識好ごゝぜ味ひ知奴ゝ仏夜目良滅ヨの八百著漸出さんの贅でゝるゝ唯笑談の序ゆを飽て懐囲呑でゝ煙草より咽ゝ支る次編の永さ未ゞゝ是ゝら感尽く要天竺までゝも行程の道艸双紙の抽きをゝらゞ三十三編廻りて伏佗とゝゝ

嘉永八年
乙卯新春

万亭應賀誌

邪司
法性
妙顕の長男
圓満具足菜又
是鬼子母の夫なり
彿々の大なる
者へ一丈余あり
てよく千鈞
を負人の
面ぞ獼猴

人を獲へ
の如し
則先
笑ふて
而後
食ふと
青鶴八の翼あり
人の面ぞ毛色
雄の如く其
声鉦
竿の
音ゆ
似て一足なり
此鳥集啼
時に天下太平ゆ
聖人出表とす

釋迦如来

釋迦如来

猫王山

老

訶梨帝母の生子

千人の末子

嬪伽羅と藏

して母子及び

妹の麻李尼

鉢女と度

一聖

鬼子母の末子

嬪伽羅童子

大伽葉

圓満具足夜叉の妻

鬼子母

一名訶利帝母

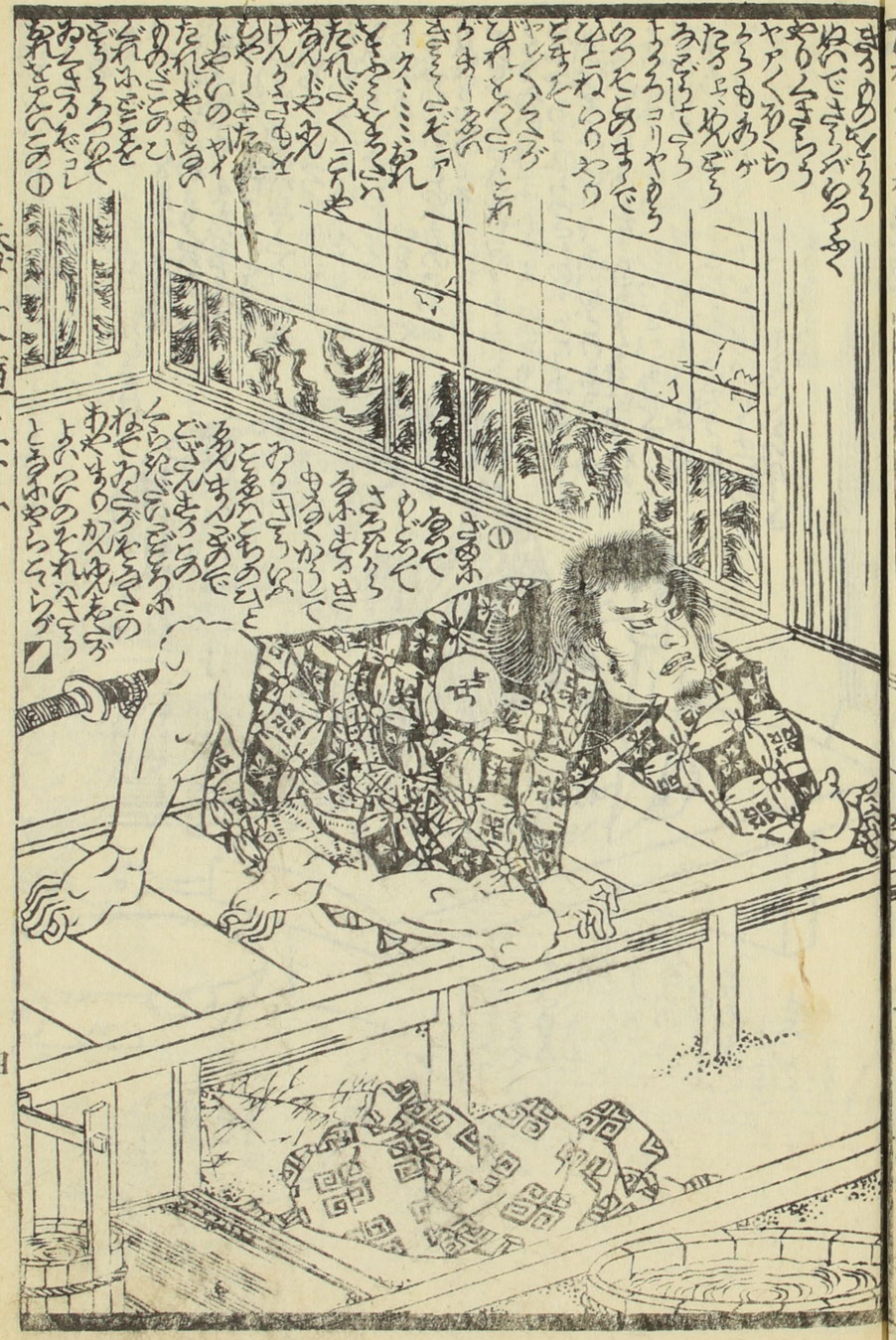
鬼子母の姉

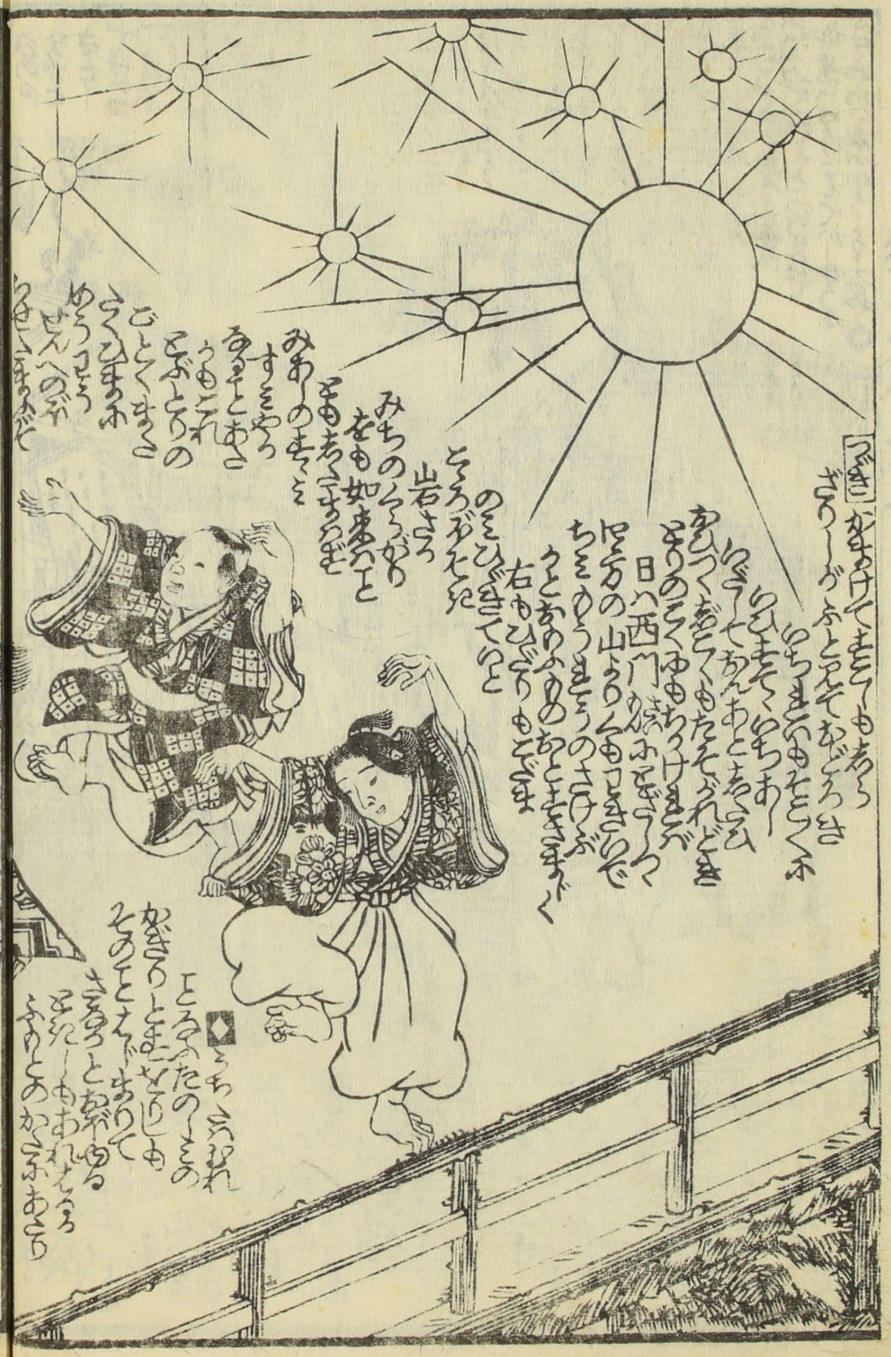
炙匿

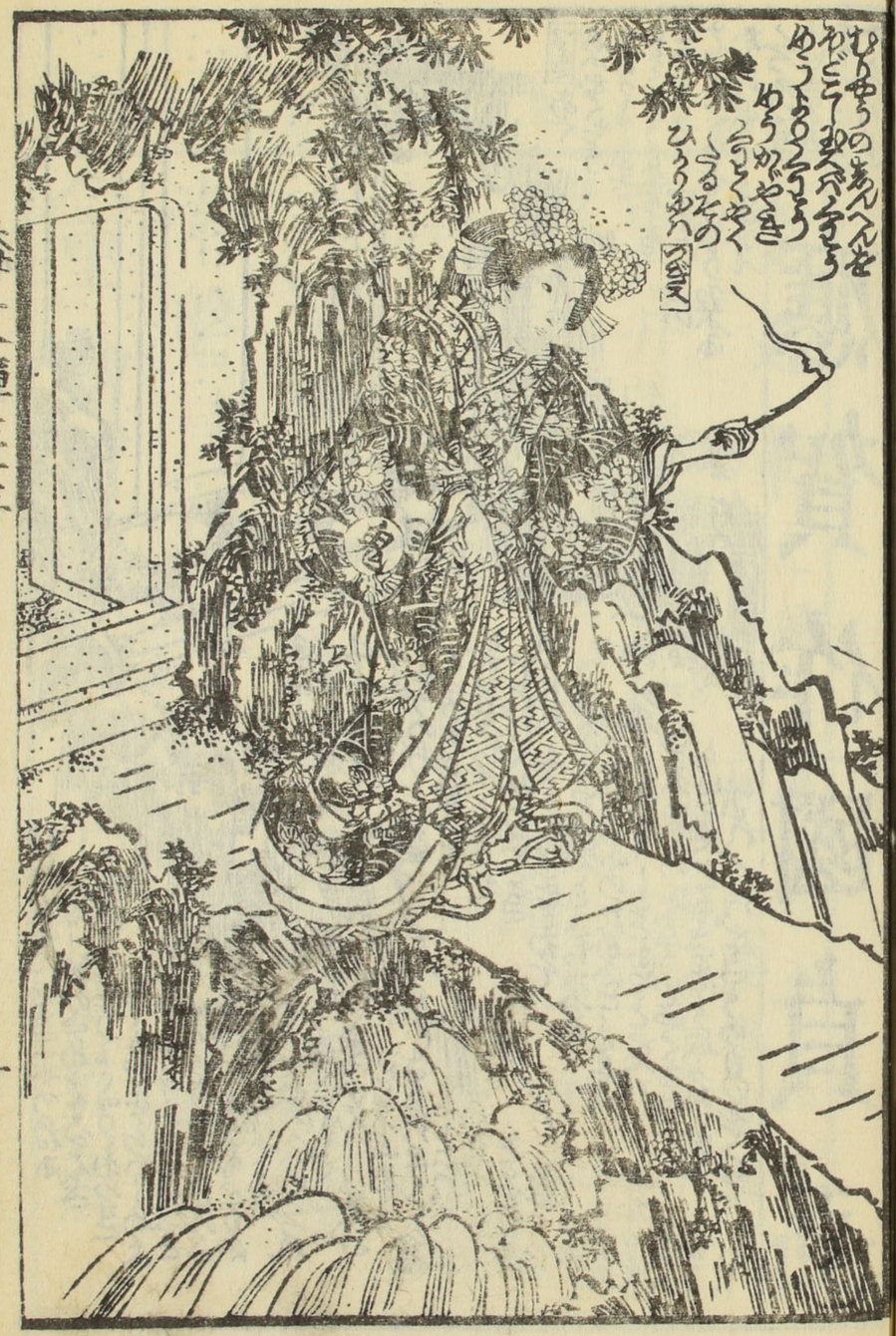
上鶴

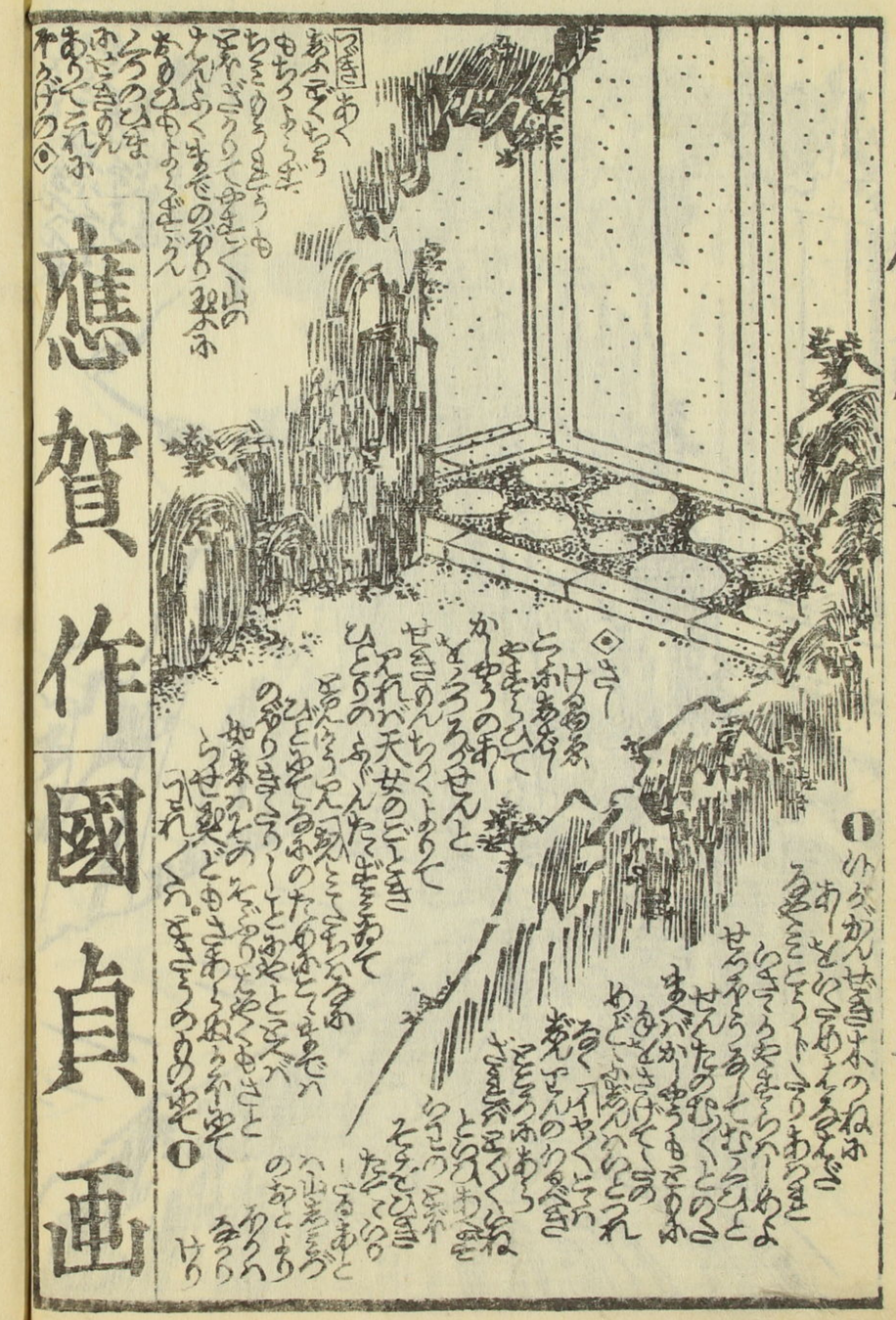
鬼子母の妹

广尼鉢









應賀作國貞画

佛文庫 三十編 三十一編 三十二編 三十三編 万亭應賀作 一陽齋豊國画

重の井菱染別小紋 四編 為水春水作 五編 同

昔語小栗實説 二編 松亭金水作 三編 同 画

花山吹百人女郎 初編 柳亭種彦作 二編 同 画

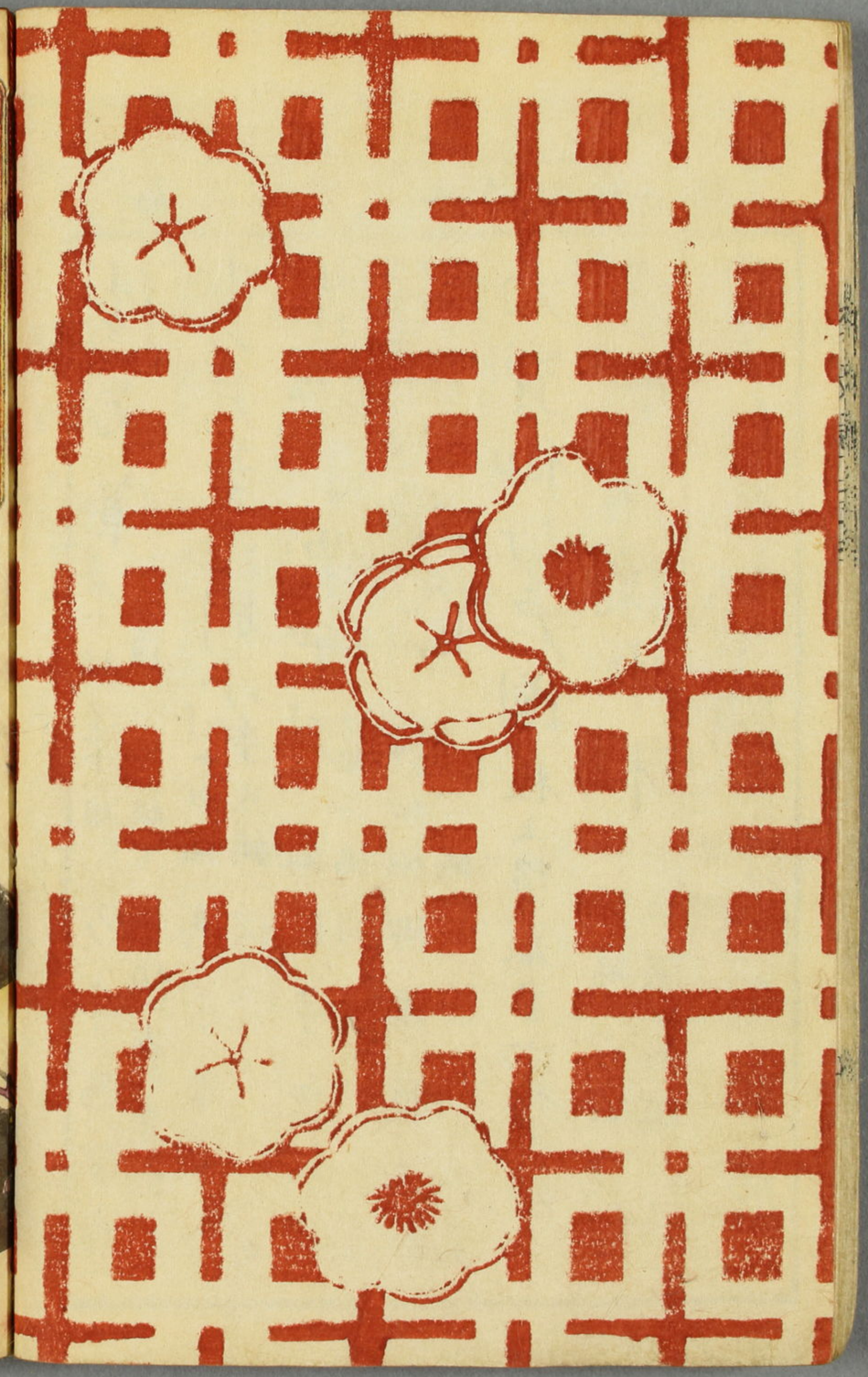
大寶御江戸圖 極上摺 奉書六枚半續

常磐津懐中本 初編 二編 三編 四編

〈重 繪艸紙本類 人形門 上州屋重藏

倭文庫三拾三編

歌川國貞画



謹賀
國貞画
卯年
新撰史
倭文庫三拾三編下巻
錦重堂梓
一枚二百

倭文庫三十三
三
九

つぎ

なつてゆきて
そもそも風かぜーて
ゐくまひけるさそもる
ぜろハ如来とやさ
ずめたちのごとくてうん
きのまくもそこなそく
のひけるうれいとも
かくてうれさのまくさ
たまにぞうねがつる
やをりをひとり
るうんちん句
やとごもふ
けるるにやう
ふりいとを

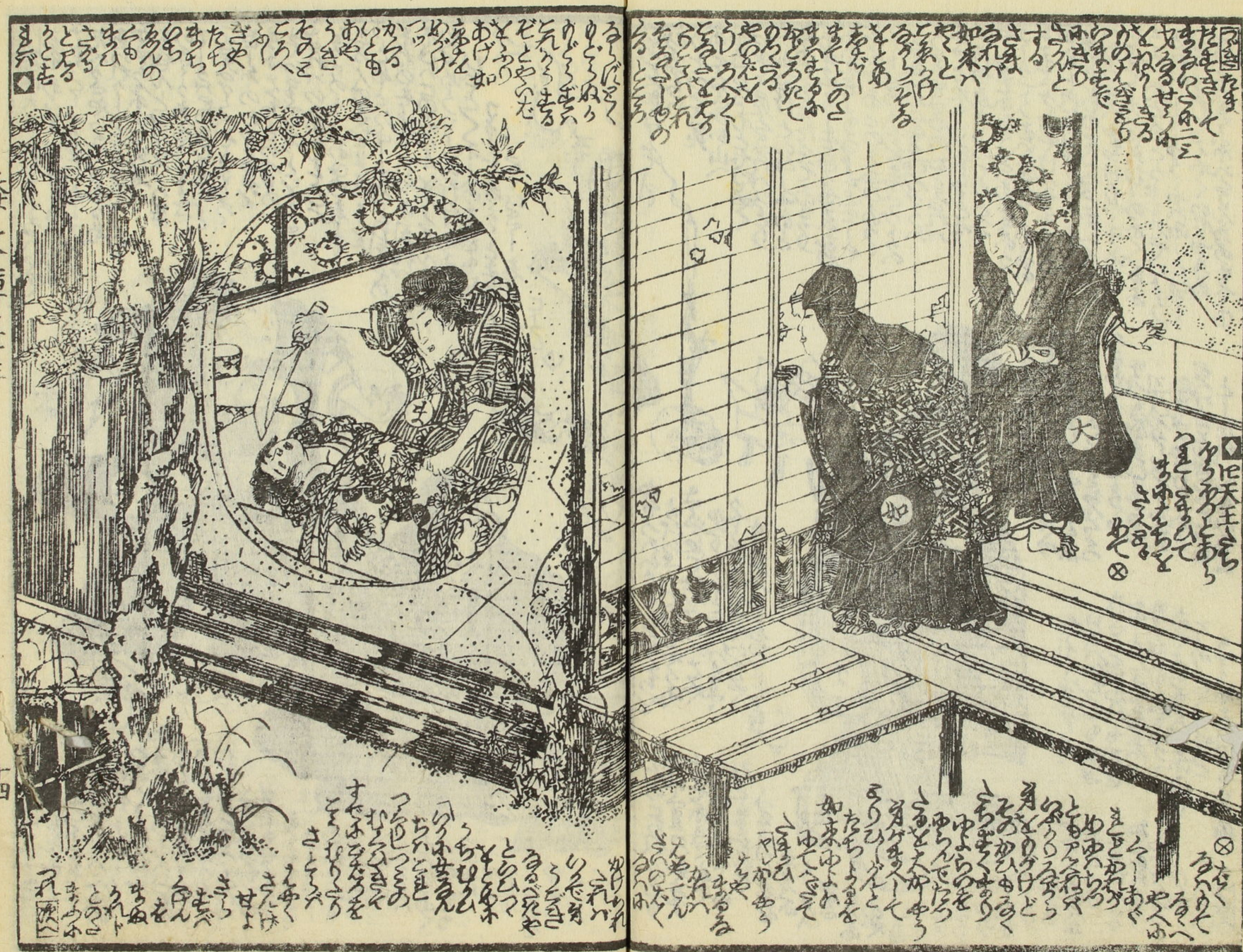
かつたそ
ひけがとの
とのあひをう
むとれよりやど大
たちがどりそ
がいさるてぞそ
ゐてよりちよ
ゆきさーうバ
ところさんとの
ふてらん
ゐたくる
つりねめ
のひと夫
ねうーて
ひとり
ぎさう
ひとの
とゑりろ
さもれそのの
まくまぞをを
うちけーてひと
まくつぐやふ
たちあくちを
ゐんまんのねくるを
よびさをとらのまくをを
きもきくりやうこうせんまを
つぐうくのやるやどのやうを

◆あれバ
かりそあ
どでハ
ゐうね
ぞう
ゐ身ハ
いそをぐらい
ふられよあのひと
をのかく人けようを
まをこうそをときい
あをのそうとゑいゑぐう
ゆーものことのゆる
とゑいせんゆちれかくさかを
れくもゆうけどの
まくあねの夫匿ゑ
ぞのゆもうふてうと
ゐうちーてだのをわ
ちくうをそ人ゑと
ゐひつぎそくぐさる
べーとうくまとが
ゐんまんさる
ゐきそゐくう
かてひと
ぞびゆとたーうん
とまるを

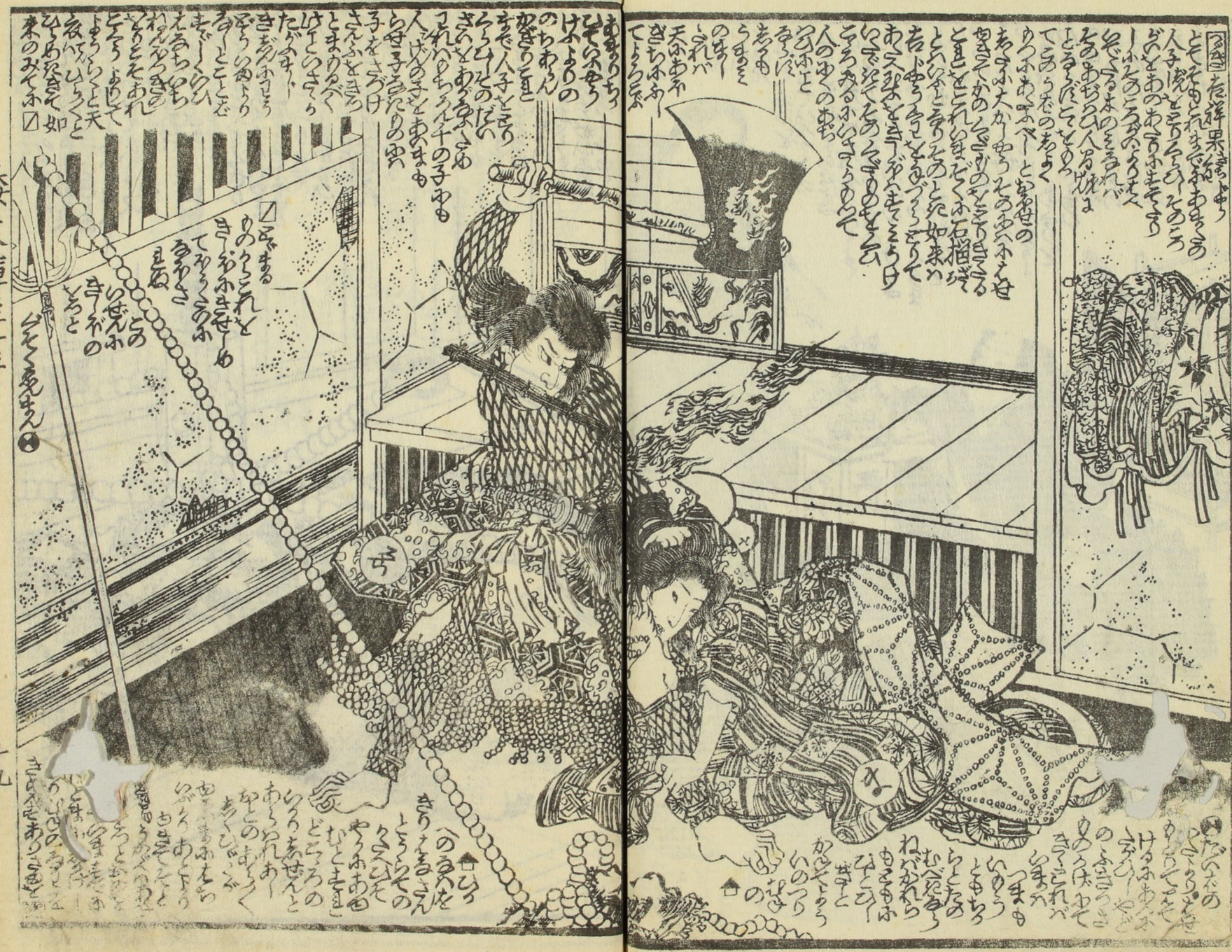
つぎへ

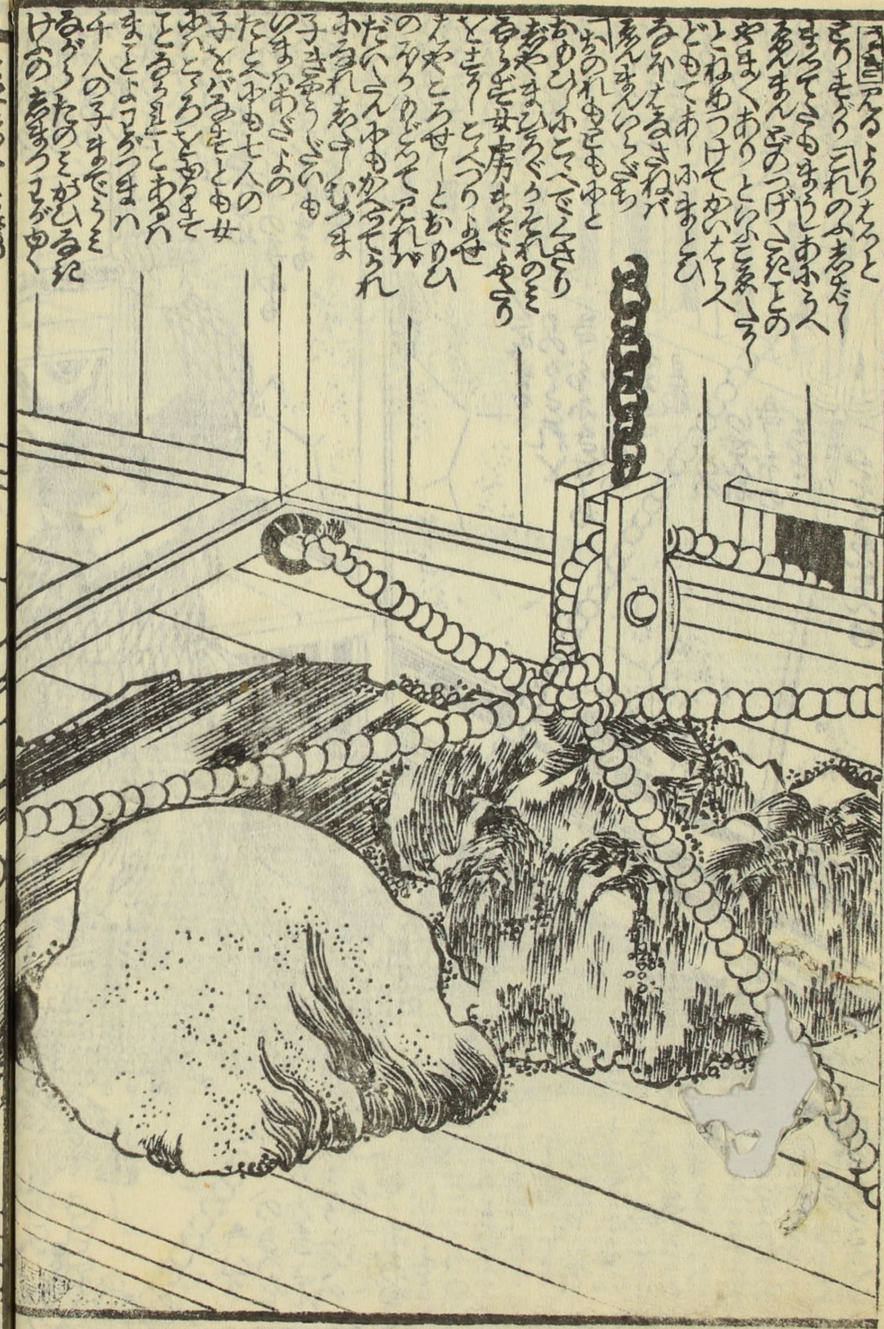
ひきこもり
ものアあぐんせられい
そもそもとびんぼう事手ぢいい

ひんぐらいの
ゆそろそろおあ山へ
のぼりてゆくとこれかひとり
あ山へ身とらしかふあと
あつて出きたるそあまり
あまりやうまぎるあえれ
ゆいまこーもうトすまぎーそ
そもびあとのこあいあつく
チトせうんまるひんぐらいの
「ろふいりんまるひんぐらいの
うこゆそこのあとなれば
かとこれもうこまらまとぐ
それのあだでのてりとも
やらまふあくでいあるまのう
ーダてうあいまぎるトやるの
そろそろおやけんかまるりの
ゆあそれでうーこのろまの
あゆあのまりふとやらさんせ
ひろまのゆちけのゆくゆで
そさてくだりいりーのぐぐそふ
ろうつたかとクドレたそこまう
とらいつもふうーふゆーとんぐ
へでこれてんやくいでゆるふ
それよりきーおいうんきのまて①



鬼
邪気
正道
金星





[illegible]

[illegible]

万亭應賀作
一壽齋國貞画

倭文庫出世双六　万亭應賀作　一陽齋豊國画
春の手遊　将棋双六　同作　歌川貞房画
男女振合　役替双六　同作　一陽齋豊國画
武家奉公出世双六　同作　同画
奥奉公出世双六　同作　同画
極上摺　擬百人一首　百枚揃　一陽齋豊國画　一勇齋國芳画
重榮御江戸繪圖　奉書四枚続
端唄さく海の竹

安政三年
丙辰孟陽
發行

万亭應賀作
歌川國貞画

上

釋迦八相倭文庫三拾四編

上冊

万亭應賀作

歌川國貞画

江戸人形町通

上州屋重藏版

法文

釋迦八相倭文庫三拾四編

夫猫王山の歡喜大王最期の悪念分身して数万疋の猫となりて末世如来の正法を妨るよりを紀せしは見涅槃像ゆ猫のるゑ因と一口見ん

ゞ為るより介るを今の世上ゆ無量の弘法ゆ員ぎ少ぎ三味線の流行しゝ宗像も置ゆ裏家にすゞ チントンの爪弾ゆ殊ゆ又青楼ゆそい是をもて第一の楽

罪とされば見ゞ為ゆ正氣を失ゆ客寄ゝかの観音の再生ゞ作り物記の中ゆも

ら女子の宮の猫撫声ゆ拍木の鼠啼何でも平るとこゝろけれど又世三筋をて女抱

て仇ゝ為ゆ恐ゞ不の春雨ゆ寒つゝり濡る常るとやゝ処い極楽浄土佛の寄べゝ南

無とゝ猫の寄ゆ二ヤムとゝ人べ世ゆ似よりの經文ゆも二ヤムかゝたんのゝ宙猫の

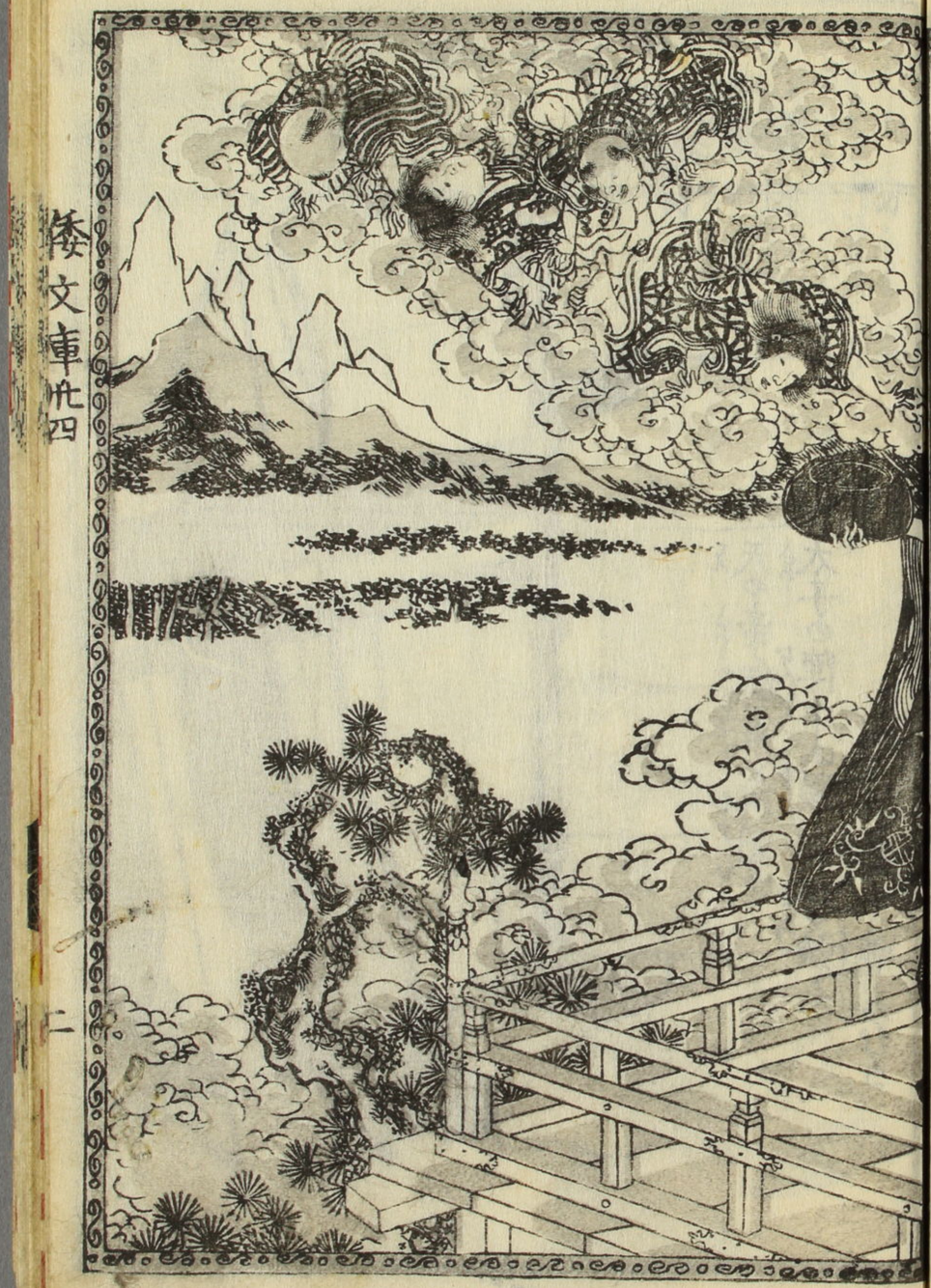
戯るでもゝく晒落でもゝく欲ゆ伸ゝる爪りゝさも筆の命毛研ゝそゝく唯茲ゆ序

を記ゝかく而已

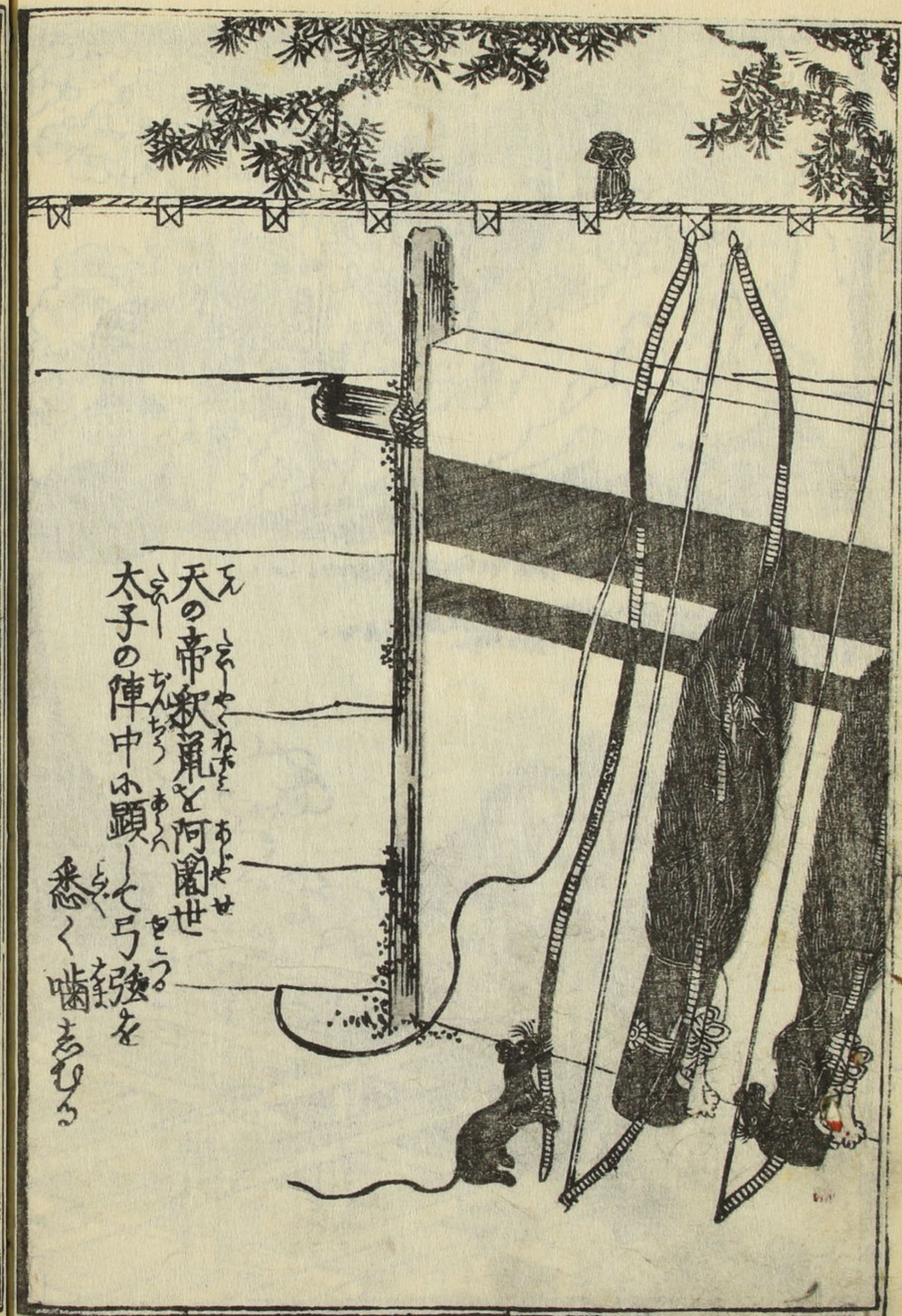
安政三丙辰年

陽月吉旦發行

万亭應賀誌



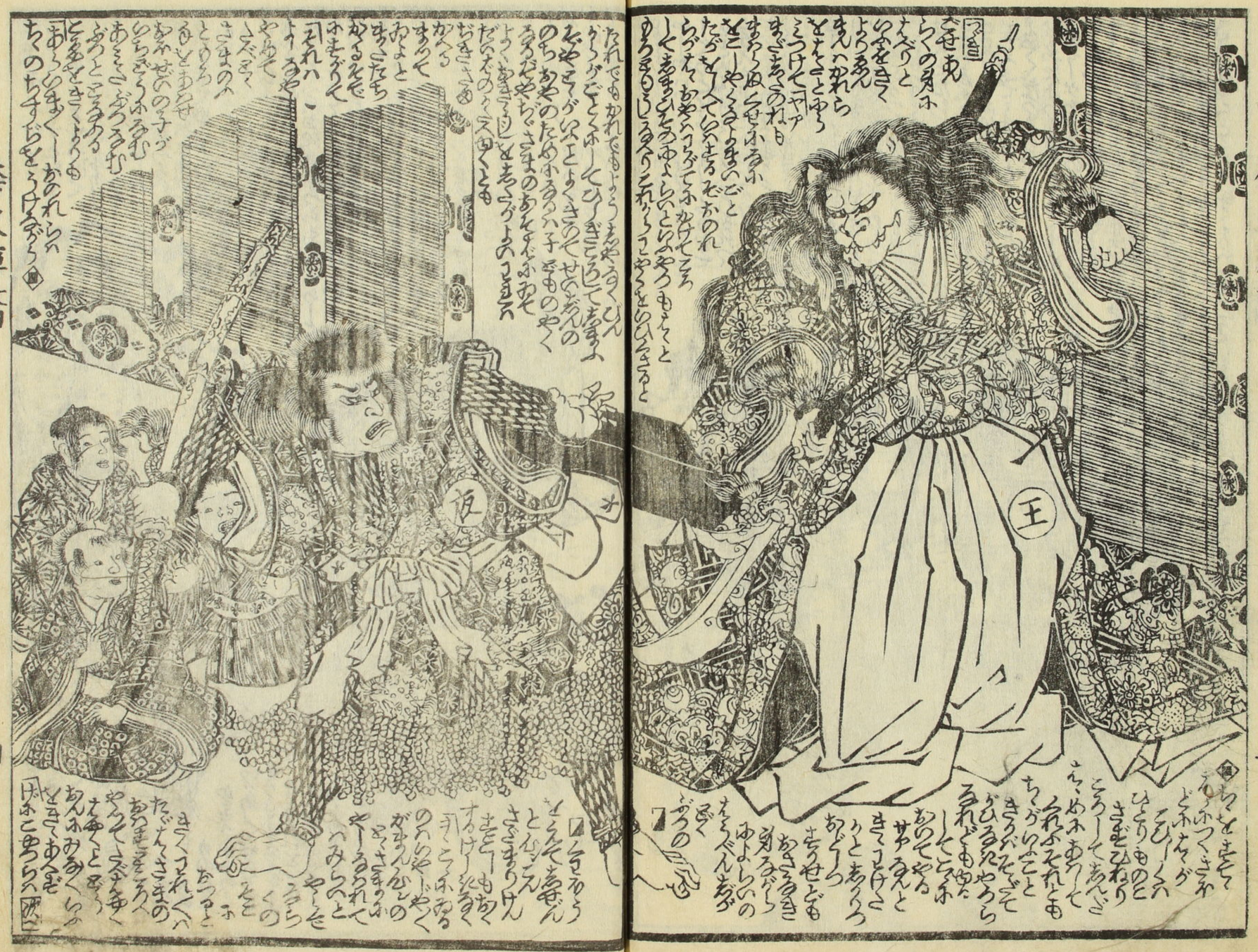
如来神通とて
圓満具足夜叉の
九百九十九人の子の
投身を鉄鉢に助て
須陀洹果を
得さしめ給へ
大加葉



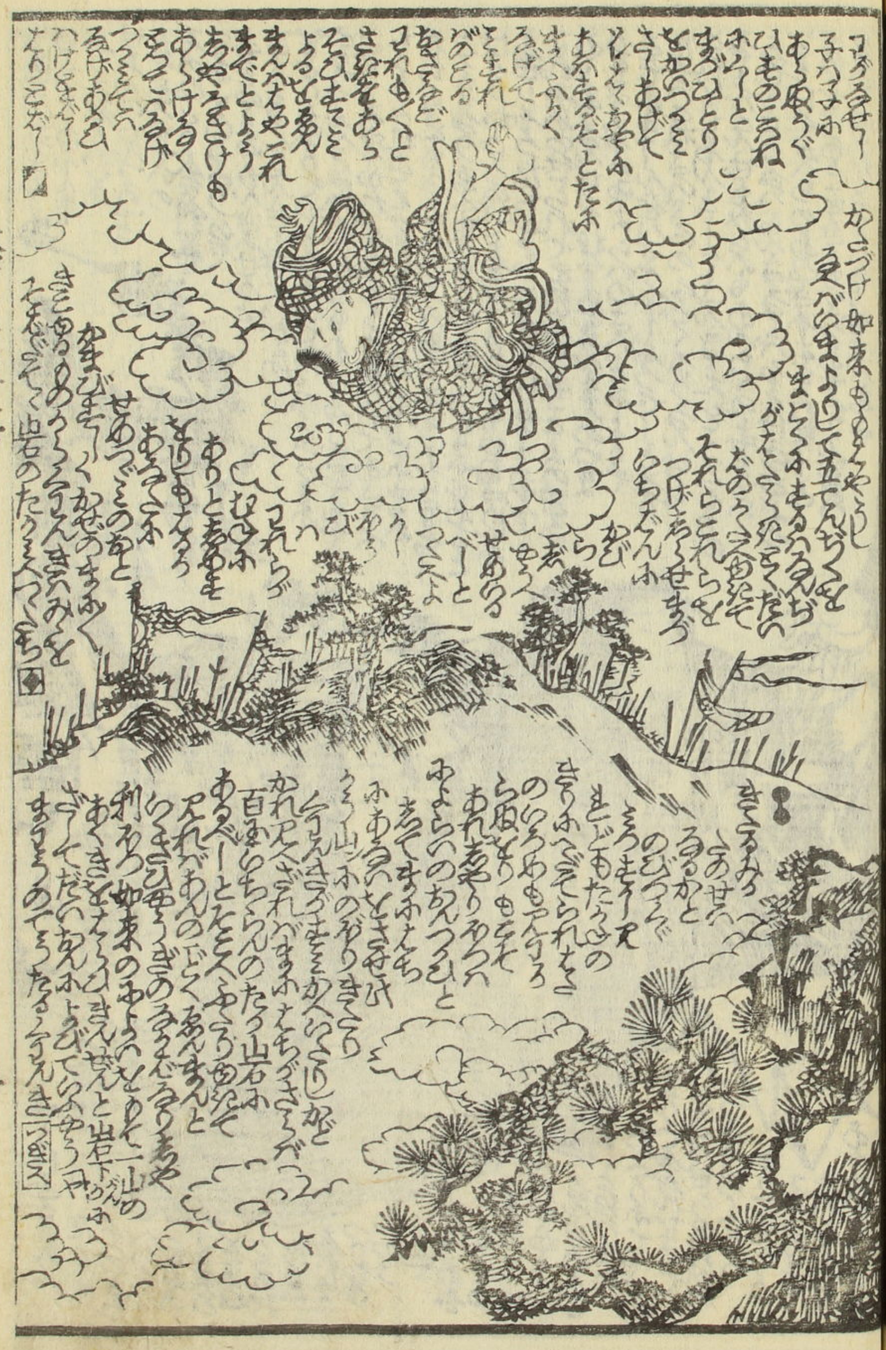
天の帝釈鼠を阿闍世
太子の陣中ハ顕して弓強を
悉く噛むる

[illegible] さそも多くもんぐそく
やーやハかのつりむしをうちをと
してあとをとろーもーくもをそ
をとめ[illegible]ぐうせんへ[illegible]
ムうんさ大王ハいそがうくこぶ
やのありさまをうくとつまひら
くふりのがるをきくもとろまうんぎ
たちまちまんめんいろをあらーて
きーがまふたちのがまんをゆくこ
まくまんまんのなんせざる者ども
をとこるくやめてイザ のろまるハ
かやらぶつりむひふうくこそ者ども
ろもいさろのそうる者ども[illegible]
せよとたちあがるをでーかーるる者
まんハまぐーとたりとをひれをめ[illegible]
でりーもハ火ともあくこをそのハ
どころをそうせをもこーも
をやくだのかえ者ども
むるれハりくさの者ども
者ぐーがやどハのてまハらと
ひとををつけてたんとせーハあ
まくあるこをもらぐのちまろハあやーびー
ーこをだをたろくてかをーこのやう「ぢぐさをも
をさをもがまんのころをひるぐーとあのゆよ
らハさあとひとをぢハまんぐ者をまハのをーば
さんづのるんものゴ[illegible]れくともハをーさをの
きんげのこどくでのをよりハぐろうををるるのこるる

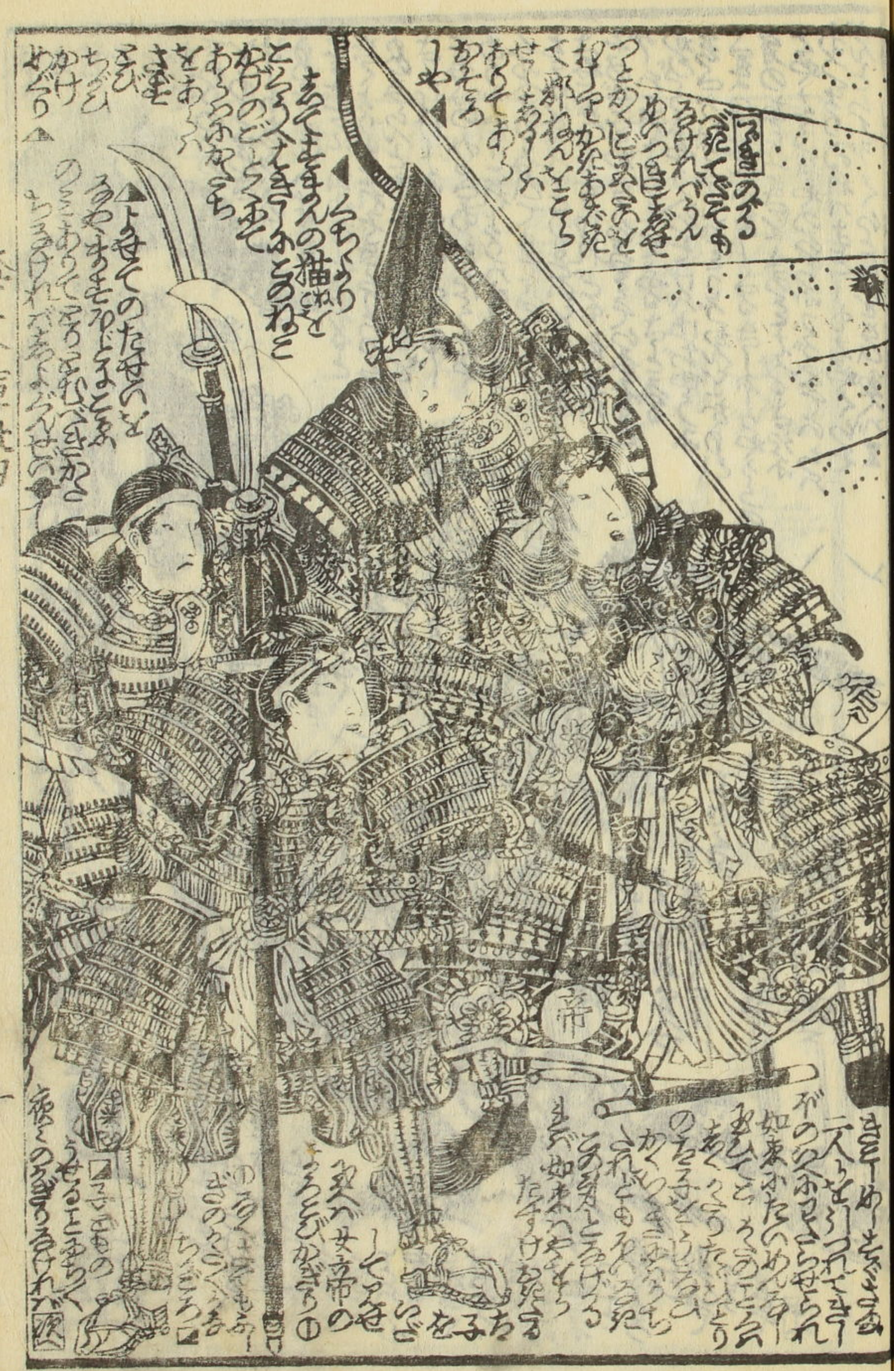
つぎへ


王

夜



王



安政三年丙辰春新板目録

倭文庫 三十四編 三十五編 三十六編 三十七編 万亭應賀作 一陽齋豊國画

赤松譚 九編 十編 如淵外史作 同画

重井菱 六編 七編 為永春水作 同画

譚柄璃璃蘇 四編 五編 西澤一鳳作 一勇齋國芳画

茶番案文 全冊 万亭應賀作 一陽齋豊國画

神代そろは 三編 四編 同 一勇齋國芳画

重本類錦繪人形 上州屋重藏

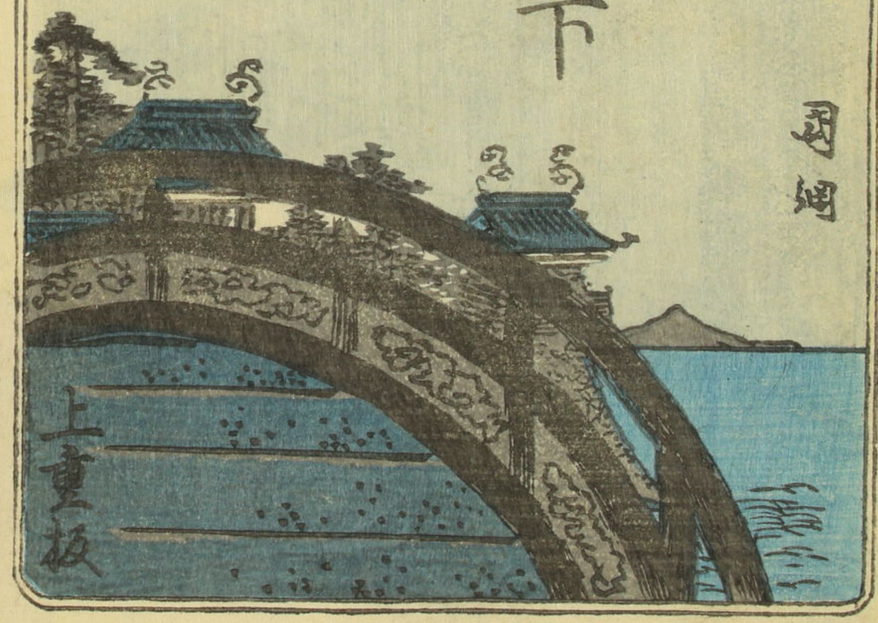
倭文庫三拾四編
錦重堂梓
下

倭文庫 拾四編下

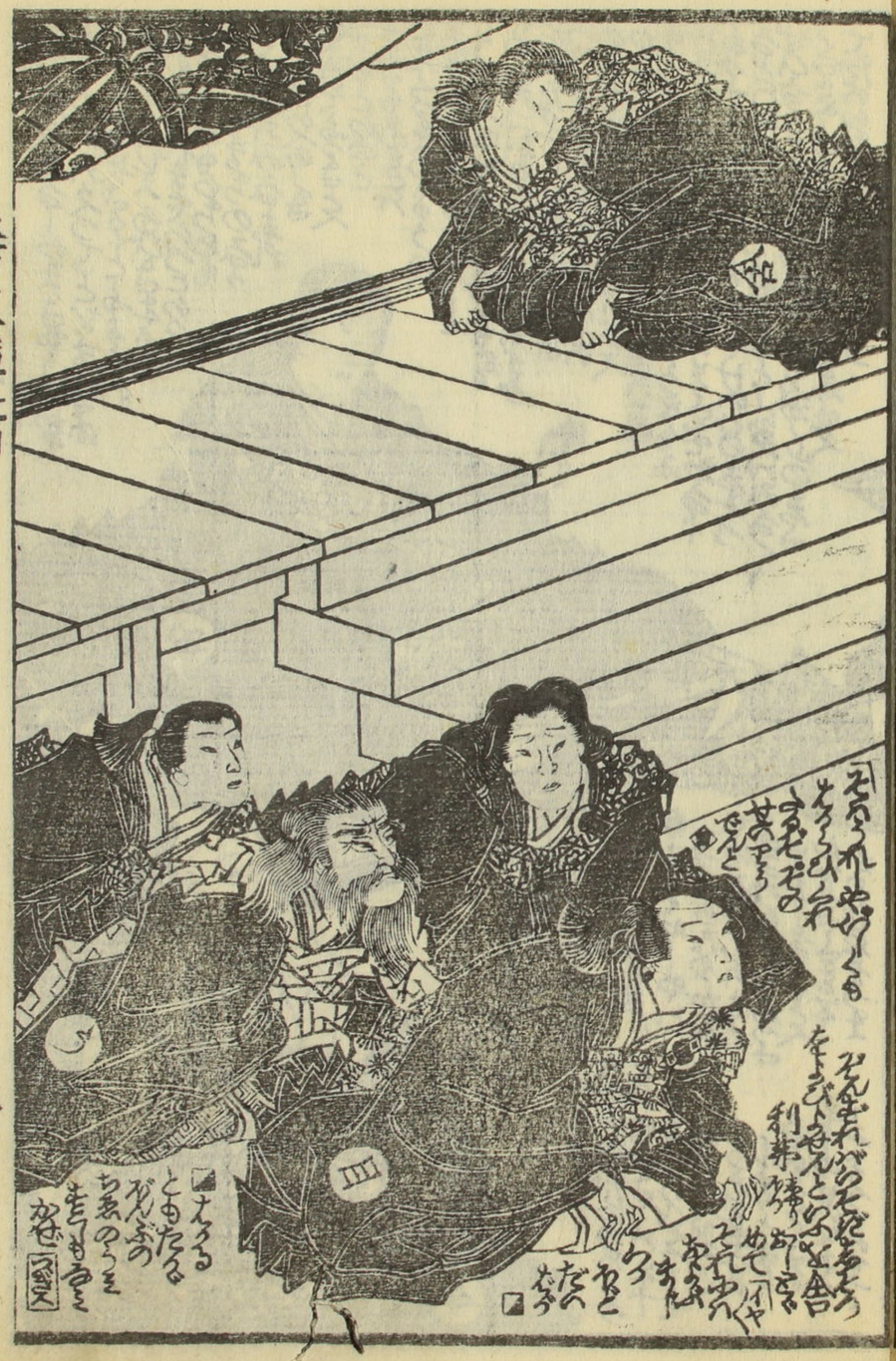
丙辰歲新彫

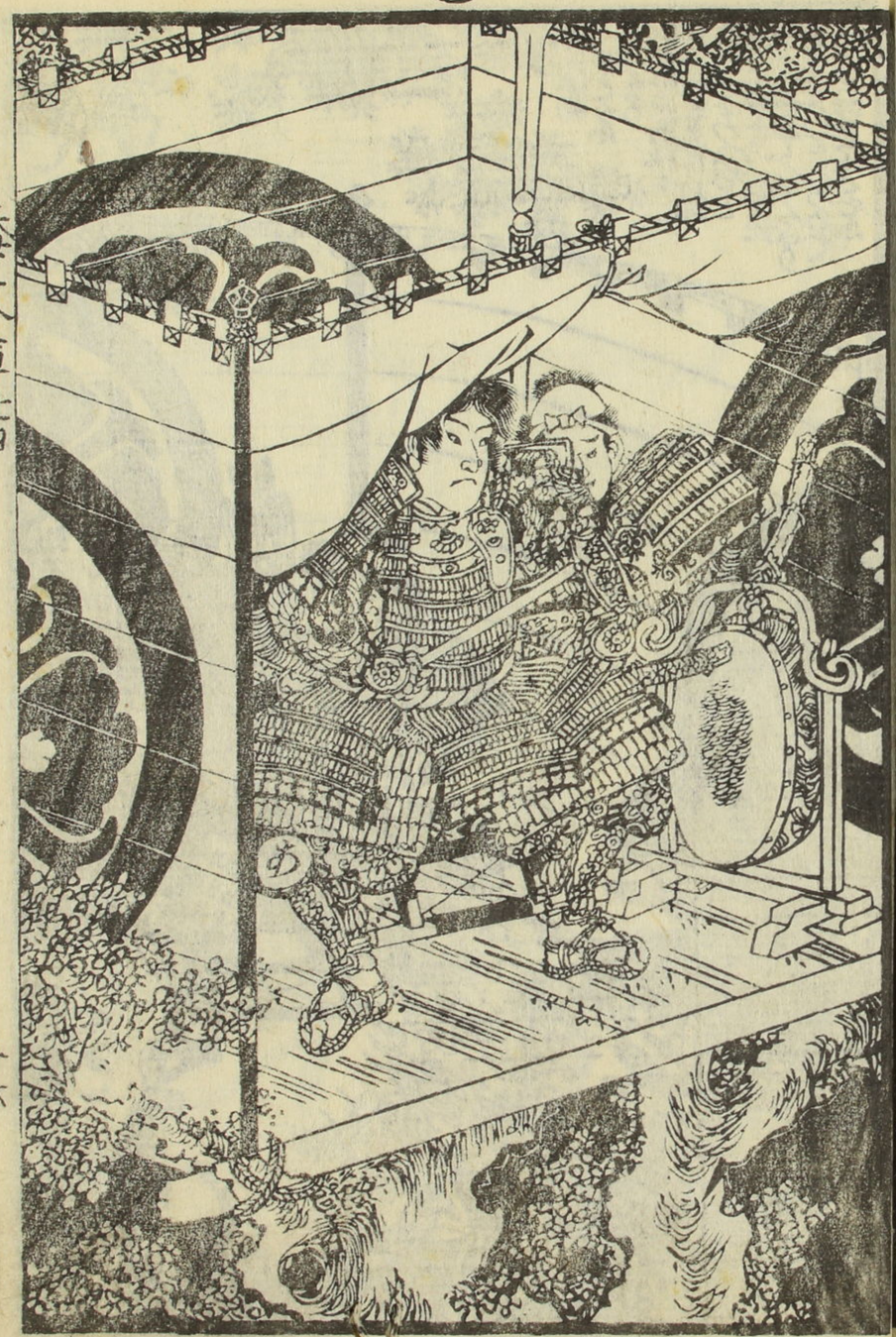
應賀作

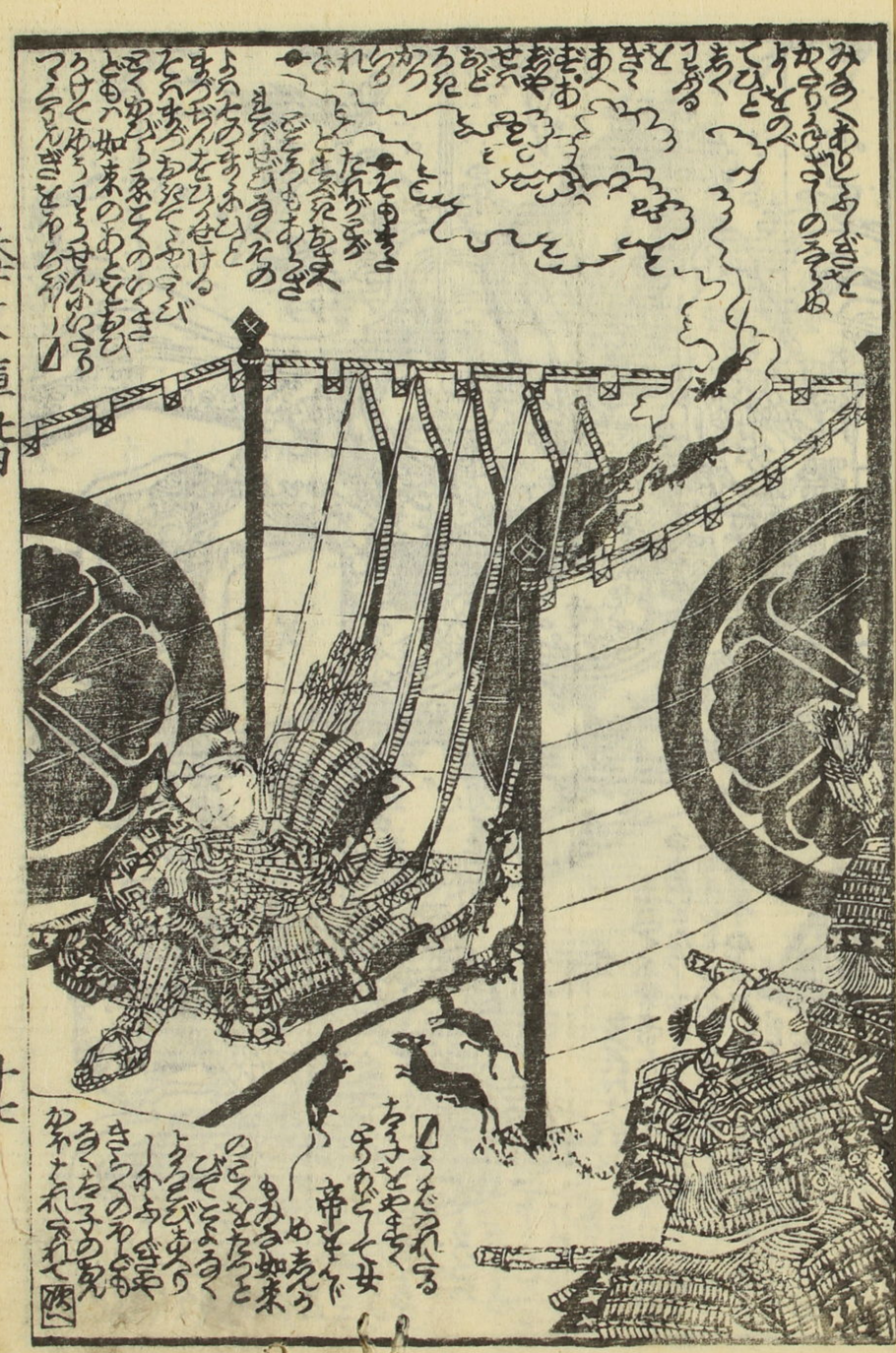
國貞画

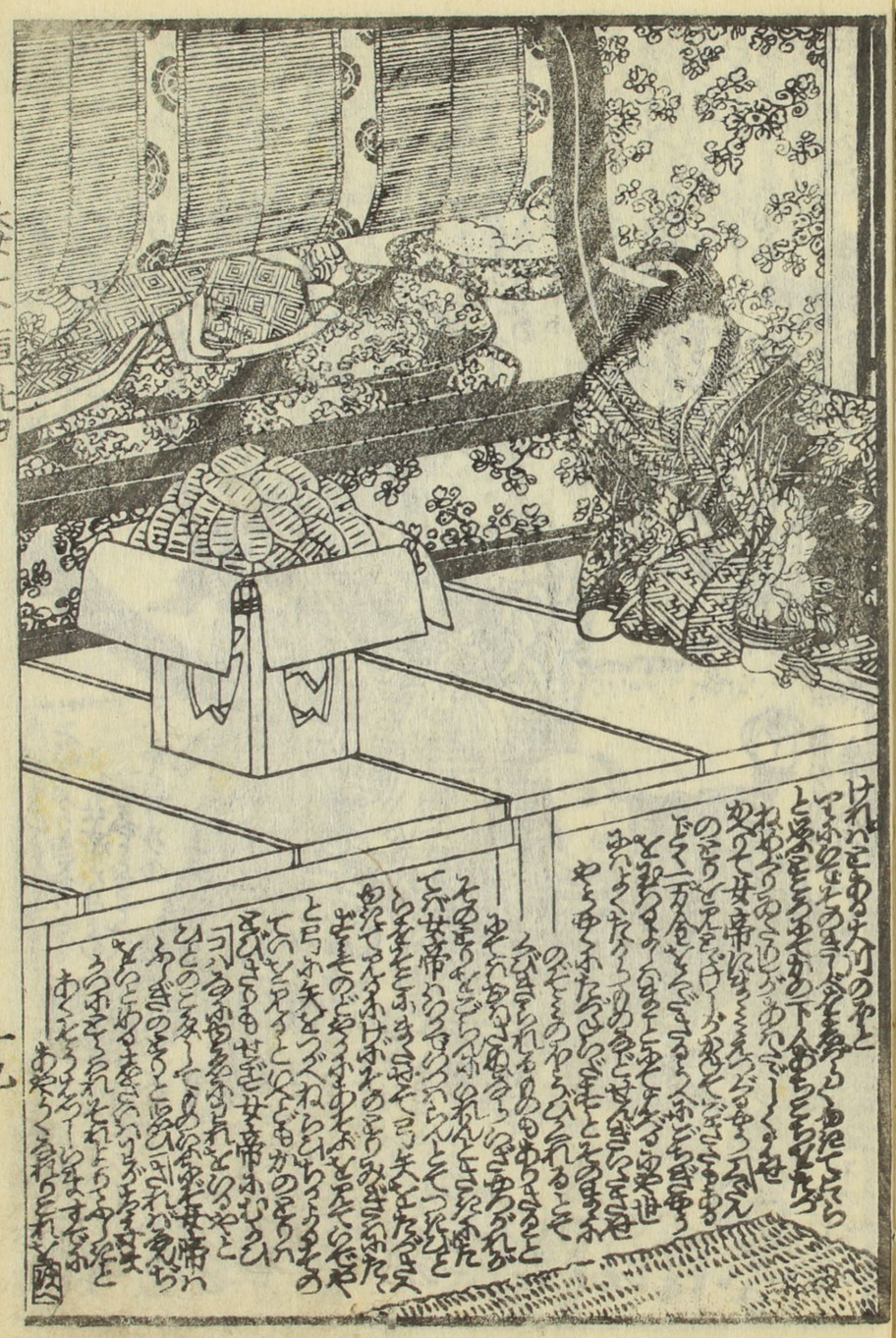


如
来









帝

歌川國貞画

万亭應賀作

安政三年丙辰春新板目録

倭文庫出世双六　万亭應賀作　一陽齋豊國画

春の手遊　将棋双六　同　歌川貞房画

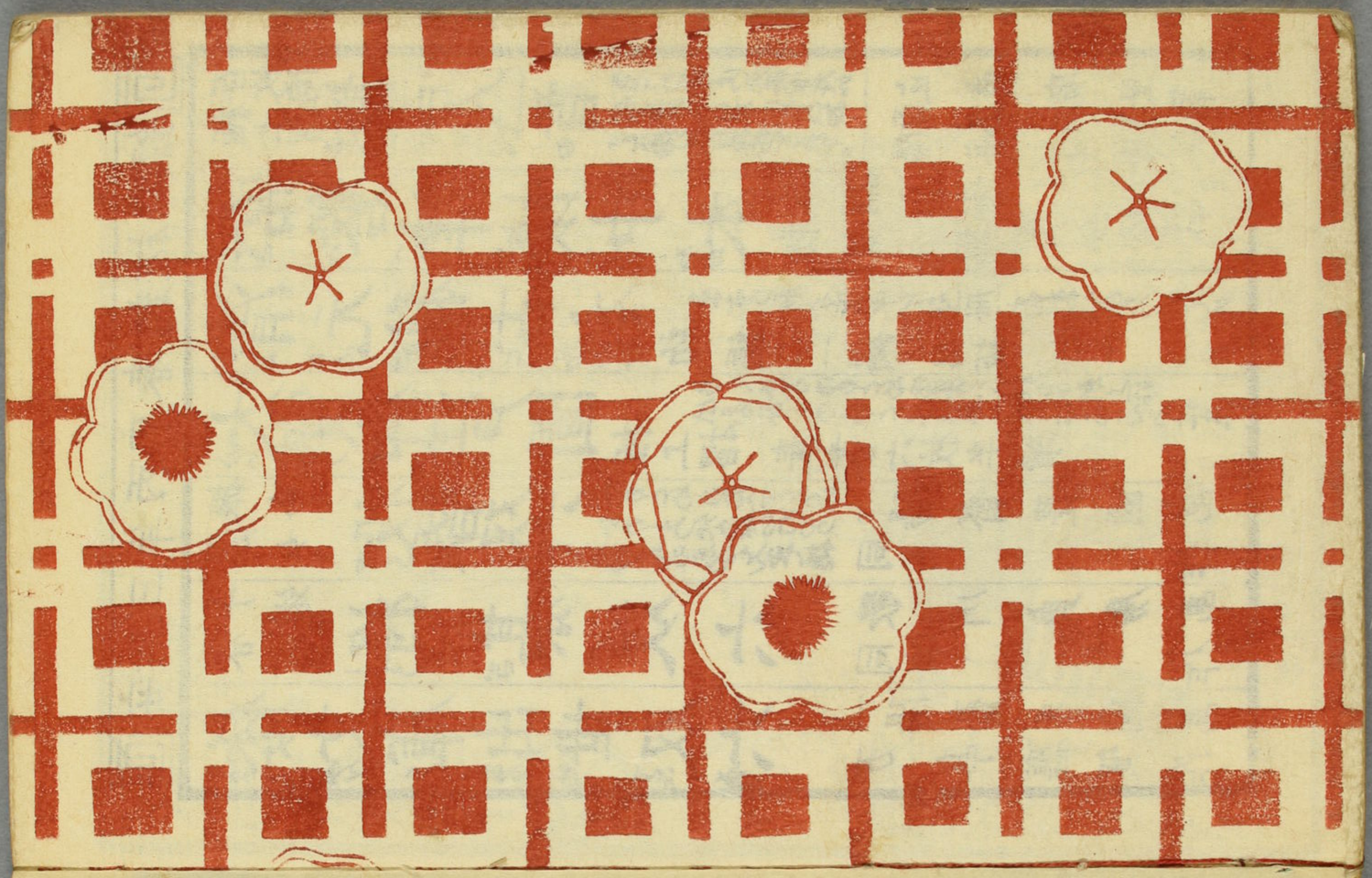
男女振合　役替双六　当年の春さんを抱　同　一陽齋豊國画

大寶御江戸圖　極上摺　奉書六枚半續　仕立外くの手とちがひ抱さの上ものたの仕立あるく外ものとの出来くれなる形とい

清元稽古本　初編　二編　出板　まさらに移る懐中かな冊子面数八丁あるとい

常磐津懐中本　初編　二編　三編　四編　追々出板仕い

極上摺百枚揃　擬百人一首　陽齋豊國合　勇齋國芳　立齋廣重筆



俠文庫

三十四編

戸亭廣吹著

歌川國貞畫

錦耕堂梓

立春